

平成30年度第1回大阪府医療費適正化計画推進審議会への意見書

認定NPO法人ささえあい医療人権センターCOML

理事長 山口 育子

2019年1月18日に開催されます大阪府医療費適正化計画推進審議会に所要があり出席できませんので、文書で意見を提出致します。

依然として大阪府におけるがん検診率が全国最低レベルということを受けて、以下の提案を申し上げます。

1. 資料「第3期大阪府医療費適正化計画に基づく主な府施策の取組状況」6ページで紹介されているように、四条畷や八尾のように大型商業施設で乳がん検診をおこなった際に非常に多くの方が参加されたとのことでした。買い物のついでに行けるという気軽さが検診率を上げるためには必要なのだらうと思います。ぜひ、このような好事例を積極的に紹介し、検診に行くハードルを下げる取り組みを実施していく必要があると思います。
2. 検診を受けるように配偶者や子どもから言われても、なかなか腰をあげない人に効果的なのは、孫から「検診を受けて長く元気でいてほしい」という言葉だと思います。幼稚園や小学校などで、「おじいさん、おばあさんに健診を勧める手紙を書こう」という取り組みはいかがでしょうか。
3. 現在、多くの助成金を利用して肺がん検診がおこなわれていますが、その方法としてエックス線が導入されています。多くの医療者にとって常識となっている「肺がんをエックス線で早期発見をすることはかなり困難」という事実が一般的には知らされていません。明らかに死亡率を下げる根拠がない方法をいまだに採り入れ、それで肺がんが早期に見つかり検診を受けている府民が期待しているとしたら、これこそ医療費の適正化ではないと考えます。このことについて言及した私の記事を資料として添付致しますので、ご検討いただければ幸いです。

以上

肺がんの早期発見は胸部エックス線検査では困難 知らされていない医療界の常識

理事長 山口 育子

2018年12月13日、社会医療法人河北医療財団(以下、河北医療財団)の特別調査委員会の委員の一人として記者会見に出席しました。一部のニュースで報じられたので、ご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが。この記者会見では、社会に対する大きな問題提起をしました。そこで今回は、その内容についてご紹介したいと思います。

特別調査委員会設置に至る経緯

特別調査委員会は、河北医療財団の施設である東京都杉並区の河北健診クリニックで健康診断・肺がん検診を受けていた女性の肺がんを見落としていたという発表を受け、その原因究明と再発防止策を検証するために設置されました。私は健診を受ける立場からの意見を求められ、委員に就任しました。特別調査委員会は5名の委員で、委員長は弁護士が務め、画像解析の専門家である放射線科医師、健診制度に詳しい医師、安全工学の専門家と私で構成されました。そして、9月から12月まで7回の委員会を経て、12月11日、河北医療財団に調査報告書を提出し、13日に記者会見に至りました。

肺がんを発症した女性は、2005年から2018年1月まで、河北健診クリニックで10回にわたり健診・検診を受けてこられました。途中までは30代だったので成人健診や区民健診、4代になってからは肺がん検診を受診されています。それら健診・検診のいずれの胸部エックス線検査においても、異常なしと判定されていました。ところが、2018年3月に足の張りや痛みの症状で他の医療機関を受診し、その際に受けた胸部単純CT検査で右肺に異常なカゲがあると指摘されました。その後、河北総合病院の呼吸器内科を受診して精密検査を受け肺がんであることが判明し、転院先の病院で同年6月に死亡されています。

河北総合病院では肺がんが判明した直後に緊急対策会議を開催し、2014年7月、2015年7月、2018年1月の胸部エックス線写真には肺がんを疑う陰影が写っていると判断し、2014年7月が肺がんを疑う兆候のあった時期と結論づけました。その後、画像診断学の権威である医師を外務委員とした院内検証委員会を立ちあげ、遅くとも2014年以降には腫瘤影があるにもかかわらず、2014年7月以降の3回の健診・検診で「異常なし」との

判定をした。その原因は胸部エックス線検査の精度管理が不十分であったことや2名の医師による読影の方法に問題があったこと、読影医が2名とも(肺がんの診断に長けている)放射線科、呼吸器内科でない組み合わせが発生したなどの問題点を指摘しました。河北医療財団ではそれを受けて見落としを認め、6月にご遺族に謝罪するとともに、7月には理事長が記者会見で公表しました。

これらの健診・検診は杉並区の委託でおこなわれていたものだったため、杉並区は河北健診クリニックに2014年9月以降の区民肺がん検診受診者約9,400名の再読影の実施を要請するとともに、杉並区肺がん検診外部検証等委員会を設置しました。

このような経緯を受け、河北医療財団では河北総合病院での院内検証委員会ではなく、客観的かつ公正な調査の実施をおこないたいと、外部の委員で構成する特別調査委員会の設置を決定したというのが大きな流れです。

専門医でも判断に迷う陰影だった!?

私はこの経緯について説明を受け、河北医療財団が明確に2014年7月の見落としを認めていることから、当初は明らかな肺がんの見落としなのだろうと思っていました。そのため、特別調査委員会は客観的に原因究明と再発防止策の提言をする場になるのだろうと委員会に臨みました。

第1回目の特別調査委員会で、後方視的に見ると2014年7月の胸部エックス線写真に陰影が写っていると説明を受けました。そして、それは健診の判定時にも指摘されていて、腫瘤ではなくニップル(乳頭)と判断していたことがわかりました。さらに、2014年7月と2015年7月の胸部エックス線写真は1方向から撮影された写真だけで、2018年1月になってはじめて肺がん検診になったため2方向から撮影されていることもわかりました。

それらの説明を受けて、私が確認したかったことは、医師であれば誰の目にも明らかに2014年7月の陰影は肺がんを疑わないといけないものなのか、それとも放射線の専門医でなければ疑うことができないものなのかということでした。というのも、これまでCOMLの活動を通して私が知り得た知識では、胸部エックス線で肺がん

を早期に見つけることは難しいと思っていました。「これは肺がんではないか」と疑う陰影が胸部レントゲン写真に写ったときには、すでに肺がんは進行している、というのが私の解釈だったのです。しかも、それは医師のなかではある意味、常識になっている事実だとも知っていました。そのため、私自身、肺がんの検診を受ける手段として胸部エックス線検査は選択肢に考えたことがありませんでした。「CTでなければ早期には見つけられない」というのが、私のなかでも「常識」になっていたのです。

しかし、第1回目の特別調査委員会では放射線科専門医の委員は出席されなかったため、上記の確認はできませんでした。そこで第2回目の特別調査委員会の席で、放射線科専門医にそのことを質問したのです。すると、「2018年1月の胸部エックス線写真は2方向で撮影されているので、ニップルでないことは位置からも明らか。この時点で異常なしと判定したことは問題がある。しかし、2014年7月と2015年7月は私でも腫瘤だと判断する自信はない」という見解だったのです。そして、河北総合病院の放射線科医も同様の見解を持っているということが紹介されました。つまり、放射線科の読影の専門医ですら、判断に迷う陰影だということがわかったのです。

「見落とし」だと指摘した専門医は、ニップルにしては位置が高いと判断されたようです。しかし、女性によっては乳房の大きさに差があり、検査台に強く胸を押し当てればニップルの位置はかなり大きく変化する可能性があります。そのような説明を専門医から聞くと、いかに判断が難しい問題かが理解できました。

さらに、1方向の撮影だと骨や心臓の死角になって病変が見えないこともあります。それに、どれだけ高性能のエックス線写真であっても、小さな病変は検出しづらいという分解能の限界があるという説明も受けました。

「知らされていない」被害者だったのでは

その後、特別調査委員の間では、胸部エックス線検査が肺がんによる死亡率を減少させる科学的根拠がそもそも不十分であり、低線量CT検査のほうががん死亡率を減少させる効果が高いデータが示されている。それにもかかわらず、そのような胸部エックス線検査の限界を知らされないまま、国民は胸部エックス線写真による肺がん検診を受け「異常なし」という判定を受けて安心していること自体に問題があるのではないかという論点で話が進んでいきました。

もちろん、件の女性が若くして肺がんでいのちを落とされる結果になったことはほんとうに残念なことです。しかし、その女性にしても、30代のときから健診を受け、胸部エックス線検査で「異常なし」と判定されて、安心

を重ねてこられたのだと思います。もし、「胸部エックス線検査では早期の肺がんを見つけることは難しい」と知っていたら、果たして漫然とこの健診・検診を受けてきたらどうかと考えると、まさしく「知らされていない」被害者だったのではないかと思います。実際に、杉並区の「がん検診のお知らせ」を見ると、「肺がん検診」の検査内容は「問診」「胸部エックス線検査」と記載されていますから、これらの検査で肺がんが見つかるかと期待してしまうでしょう。

特別調査委員会では、もちろん河北健診クリニックの検診体制の問題点も指摘し、再発防止策の提案もしました。しかし、もっとも問題視したのは、河北医療財団が肺がんによる死亡率を減少させる検診の方法として胸部エックス線検査が有効ではないと知りながら、漫然と杉並区の健診・検診を引き受けてきたことではないかということでした。今回の特別調査委員会の提言が、世のなかで巨額の予算を投じて漫然とおこなわれている胸部エックス線検査による肺がん検診の見直しにつながることを願って止みません。

●12月の活動報告①(報告②は12ページにございます)

講演・シンポジウム

- 1日 日臨技近畿支部医学検査学会(奈良)
- 4日 大阪赤十字病院
- 6日 庄内余目病院(山形)
- 11日 近畿大学医学部(大阪)
近畿大学病院
- 15日 神奈川県薬剤師会
- 18日 若手県地域医療を支える県民シンポジウム
- 19日 栃木県医療安全講習会

委員として出席した会議

- 5日 厚生労働省厚生科学審議会臨床研究部会
- 6日 医療系大学間共用試験実施機構診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験委員会(東京)
- 10日 京都大学医の倫理委員会・臨床研究審査委員会
- 11日 厚生労働省医道審議会専門研修部会
- 12日 厚生労働省医師需給分科会(26日も)
厚生労働省国立高度専門医療研究センターの今後の在り方検討会
- 14日 厚生労働省厚生科学審議会医薬品医療機器部会
- 17日 医療機能評価機構患者・市民支援部会(東京)
- 20日 厚生労働省医療情報の提供内容等のあり方に関する検討会
- 21日 大阪大学医学部附属病院医療安全監査委員会
- 27日 京都大学臨床研究審査委員会

掲載誌(紙)

- 11月27日 「ツ・ナ・ガ・ル」(一般社団法人チーム医療フォーラム)
- 12月 『冬のけんこう』(株社会保険出版社)
- 1日 『すこやか健保』(健康保険組合連合会)
- 『医事業務』(産労総合研究所)
- 『クリニックマガジン』(株クリニックマガジン)
- 10日 『Medical Education』(株SCICUS)
- 『週刊現代』(株講談社)
- 11日 『医療ルネサンス』(読売新聞社)

SP(模擬患者)セミナー

- 10日 姫路医療センター附属看護学校(兵庫)
- 19日 大阪市立大学医学部共用試験医療面接